

平成29年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 平成29年4月19日(水)

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

(1)教科に関する調査

○調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用
の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～6学年> 国語、社会、算数、理科

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

学校名 品川区立伊藤学園

【 国 語 】

(1) 国語の定着状況の概要

- 2年 「基礎」は、目標値の 81.8 に対し、正答率は 88.3。「活用」は、目標値の 65.0 に対し、正答率は 72.5 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。
- 3年 「基礎」は、目標値の 73.0 に対し、正答率は 77.0 と上回っているが、「活用」は、正答率は 57.0 で、大きく下回る結果となった。
- 4年 「基礎」は、目標値の 70.0 に対し、正答率は 75.6。「活用」は、目標値の 55.0 に対し、正答率は 61.8 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回る結果となった。
- 5年 「基礎」は、目標値の 71.7 に対し、正答率は 85.8。「活用」は、目標値の 58.0 に対し、正答率は 76.5 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を大きく上回っており、特に活用の力が身に付いている児童が多いことが分かる。
- 6年 「基礎」は、目標値の 73.0 に対し、正答率は 80.2。「活用」は、目標値の 54.0 に対し、正答率は 60.3 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、学習内容が定着している児童が多いことが分かる。

(2) 具体的な課題

- 2年 どの分野においても目標値を上回っているが、「ものがたりをよみとる」と「調べたことを発表する」が目標値と僅差値であり、「書くこと」に課題があると分かる。また、「ものがたりをよみとる」の場面の様子や登場人物の気持ちを読み取る問題では、目標値を下回っている正答率があり、ここに課題があると感じる。
- 3年 「言語についての知識、理解、技能」は概ね定着している児童が多いものの、「話す、聞く能力」や「読解力」がウィークポイントの児童が 4 割ほどいる。
- 4年 どの分野においても目標値を上回っているが、「言葉の学習」と「調べたことを発表する」が目標値と僅差値であり、「言葉の知識」と「自分の言葉にして話すこと」に課題があるとわかる。また、「作文」は、目標値を下回っている正答率があり、ここに課題があると感じる。
- 5年 どの領域においても目標値を上回っているが、「言葉の学習」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」において、正答率が目標値と僅差値の問題があった。
- 6年 「漢字を書く」の問題で目標値 80.0 に対し、正答率は 73.7 であった。漢字を読むことはできるが、書くことに関しては定着に差があることが分かる。「交流会での遊びを提案する」の「書くこと」の問題で目標値 40.0 に対し、正答率は 33.8 であった。与えられた情報から必要な情報を読み取り、説明する能力に課題が見られた。

(3) 課題の原因

2年は、「読むこと」は、特に個人差がある領域であり、正答率の低い児童は、問題文を読まずに設問に答えていた。そのため、文章を読むことの習慣化が必要であると感じる。

3年は、好奇心旺盛で一度に多くのことに興味がわいてしまう児童が多い。そのため落ち着いて話を聞いたり、話したりすることを不得意としている児童が多く、「聞く、話す」力にウィークポイントが見られる。

4年は、前年度より語彙の少なさが課題であった。本を読む児童と、読まない児童の二極化が見られる。活字にたくさんふれることが必要である。

5年は、「言葉の学習」の文の構成について理解が足りない。また、目標値 30.0 の問題のみ正答率が下回ってしまったため、発展的な知識も必要なことが分かった。

6年は、普段の会話や記述で主語が抜けていたり、主語と述語の関係が合っていないかたりする現状がある。また、質問の内容に対して、正しく答えられないこともある。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

2年は、「読むこと」の力を高めていくために、授業内での活動はもちろん、家庭学習の音読や積極的な読書活動への呼びかけを工夫し、活字になれる時間を多く設定していく。

3年は、コミュニケーション力を育成するため、基本話形の指導に重点を置き、学校生活全般にわたって、意図的に活用の場を設定するようにしていく。

4年は、語彙を増やしていくために、今まで以上に読書を推進し、宿題として音読を定着させていく。短い文章を書く練習、言葉の知識を身に付けさせるためのプリント学習などを、繰り返し指導していく。

5年は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の学習内容において、例文を用いた学習を反復的に行うことで、定着させていく。

6年は、正しい文の構成や質問に対する答え方を丁寧に指導していく。授業では、段階を踏んで質問をすることで、答えてほしい内容は何かを児童自身が理解できるように訓練していく。作文や日記を書く際も、その都度正しい文法を指導していく。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

2年は、今回同様全ての領域で目標値を上回る正答率を目指すと同時に、「読むこと」の正答率が目標値を 10 ポイント以上、上回れるようにする。

3年は、目標値を上回る正答率を目指すために、聞く力を育てるために、授業中のみならず、学校生活全体の中で、話の要旨を正しく聞き取る力を育てていく。また、読解力を育てるため、音読の課題を毎日与えて、文章の要旨を読み取る力を育て、全体の正答率が目標値を大きく上回れるようにする。文章を丁寧に読み、要旨を正しく掴み取る力を育てるとともに、優れた表現力に意図的に触れさせることで、自身の表現力も高めていきたい。

4年も、全ての領域で目標値を上回る正答率を目指すと同時に、「言葉」と「作文」の正答率が目標値を大きく上回れるようにする。

5年は、今年度の数値が 10 ポイント以上目標値を上回っていたため、それを継続できるよう、学習内容を確実に定着できるようにする。特に「活用」の力は 76.5 と高かったため、次年度も継続できるようにする。

6年は、今回同様全ての領域で目標値を上回る正答率を目指すとともに、与えられた条件に合わせて説明する文章を書く力を鍛え、正答率が目標値を上回れるようにする。

【 国 語 】

(1) 国語の定着状況の概要

- 7年 「基礎」の目標値 70.0 に対し、正答率は 76.7、「活用」の目標値 62.1 に対し、正答率は 74.5 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。
- 8年 「基礎」の目標値 70.6 に対し、正答率は 75.9、「活用」の目標値 55.0 に対し、正答率は 59.3 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。
- 9年 「基礎」の目標値 71.0 に対し、正答率は 82.4、「活用」の目標値 56.4 に対し、正答率は 69.3 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

(2) 具体的な課題

- 7年 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する領域で、特に「漢字を書く」問題では正答率が各問の目標値 60%～85%に対して 2%～5%下回る。また、「読むこと」分野に関しては、「文学作品の内容を読み取る」問題の「文章の表現の特徴をとらえる」問題で目標値 50.0%に対し、正答率 36.4%である。
- 8年 「話すこと・聞くこと」の領域で「司会者の工夫を聞き取ることができる」問題が目標値 50.0%に対して正答率が 36.8%であった。また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する領域で、「文法・語句に関する知識」で「単語について理解している」問題で目標値 60.0%に対して正答率 39.2%、「故事成語について理解している」問題で目標値 50.0%に対して正答率 40.8%であった。
- 9年 どの領域も目標値を上回っている。しかし「話すこと・聞くこと」の領域での「話し合いの内容を聞き取る」問題では目標値 72.5%に対して正答率 76.6%と、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する領域での「文法・語句に関する知識」の問題では目標値 58.8%に対して正答率 62.2%については、他の問題では 10 ポイント以上上回っているのに対して 4 ポイント程度という点から、より一層の知識の定着と活用ができることが求められる。

(3) 課題の原因

7年は、漢字の基礎的な積み上げに課題があり、語彙力の欠如が見られるので、基礎学力の指導が必要であり、習慣化させていく必要がある。また、読むことについて文章表現の特徴とはどのようなものか基本的な捉え方が身に付いていないと思われる。

8年は、話し合い活動において、内容の聞き取りはメモを取って把握はできるが、流れに沿った話し方の工夫や司会の方法について身に付いていない。また、文法については文節をどのように単語に分けるかについて理解をしていない。故事成語についても基本的な語彙力が身に付いておらず反復練習が必要である。

9年は、「話の内容を正確に聞き取ること」は概ねできるが、「聞き手に理解してもらうための話し方の工夫を聞き取ること」や「質問に対して、根拠を明確にして答えること」については個人差がある。これはスピーチやディスカッションなどの活用で自分が話すための工夫を考えることはできて、他人の話す内容の工夫について細かく分析する活動が十分でなかったことが原因として考えられる。また、文法・語句の領域については「用言の活用」「同音異義語」の練習問題に継続的に取り組むことが必要であった。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7年は、漢字の書きを中心に語彙力の強化を行い、授業時間の最初に練習時間を設け、確認テストに取り組むとともに、繰り返し練習を行うための方法を指導して家庭学習を習慣化させる。復習用プリントを家庭学習や長期休業時等の補助教材として活用もしていく。文章表現の特徴について、教材ごとに特徴や効果について数多く触れて読むことの学力向上を図る。

8年は、話し合い活動において、ICT機器を用いた動画や音声教材も活用して、実際の話し合いの流れに沿った話し方や司会の方法について繰り返し指導していく。文法や語彙指導については、授業内で体系的に反復指導を行い、定着の強化を行う。復習用プリントを家庭学習や長期休業時等の補助教材として活用もしていく。

9年は、話す・聞く活動で、ICT機器を用いた動画や音声教材も活用して、スピーチや話し合い活動の工夫をよく分析してから自分が話す内容を考え、聞く側においても観点別に聞き取り、工夫したことを意識する活動をしていく。また、文法・語句の領域については「用言の活用」「同音異義語」の練習問題に継続的に取り組んでいく。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

7年は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「漢字を書く」問題、そして「読むこと」の領域に関する「文学作品の内容を読み取る」問題の「文章の表現の特徴をとらえる」問題について目標値を上回る正答率を目指す。また、その他の領域に関しても、目標値を上回る正答率を目指す。

8年は、「話すこと・聞くこと」の話し合いに関する問題、「書くこと」の領域で目的や手段に応じた書き方に関する問題、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する領域で、「文法・語句に関する知識」について、目標値を上回る正答率を目指す。また、その他の領域に関しても、同様である。

【 社 会 】

(1) 社会の定着状況の概要

4年 「基礎」は、目標値の 76.1 に対し、正答率は 79.3。「活用」は、目標値の 53.3 に対し、正答率は 53.1 であった。「基礎」は上回ったものの、「活用」は、正答率は目標値を僅かに下回った。

5年 「基礎」は、目標値の 73.0 に対し、正答率は 77.7。「活用」は、目標値の 54.0 に対し、正答率は 59.5 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

6年 「基礎」は、目標値の 67.9 に対し、正答率は 79.4。「活用」は、目標値の 48.3 に対し、正答率は 54.6 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

(2) 具体的な課題

4年 内容別に見ると、正答率が全ての項目で目標値を上回った。「買い物調べ」では、地域の人々の生産や販売の様子に関する資料を読み取る力が 62.2 と目標値の 65.0 を下回った。様々な資料の内容を理解し、それらを活用して判断することに苦手意識が見られる。

5年 「地図の見方」の問題では、目標値 61.7 に対し、正答率が 75.7 と高い数値を示していた。しかし、「県の様子」の問題では、目標値が 60.0 であるのに対し、正答率が 54.3 となっており、目標値を下回る結果であった。特に、地図を見て地形を読み取る問題を苦手としていた。

6年 「工業生産と貿易」の問題では、目標値 68.3 に対し、正答率が 83.8 と高い数値を示していた。しかし、「工業生産と工業地域」の問題では、目標値が 66.7 であるのに対し、正答率が 68.9 となっており、その中の「工業地帯や主な工業地域の分布に関する資料から、現状や特色について読み取る問題」においては、目標値 50.0 に対して正答率 38.4 と、目標値を大きく下回る結果であった。

(3) 課題の原因

4年は、資料の見方が課題であり、一つ一つの資料が何を表しているのかの読み取りが不十分である。また、質問が何を求めているのか、よく読んで理解していないことが考えられる。

5年は、地図を見て、「何があるか」といった表面上の事柄には気付けるが、事象との因果関係や気候との関連まで考えが及ばないことが原因と思われる。

6年は、資料を見たり読んだりすることはできていても、そこから読み取れることは何かといった、事象との因果関係を考察することに慣れていないことが原因と思われる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

4年は、資料を読み取らせる指導を社会科や理科などの学習を通して習慣づけていくことである。

5年と6年共に、資料を見る観点や、どんなことが読み取れるかを指導していく必要がある。そのために、ICT機器を活用して地図と実際の写真とを対比させたり、ノートに読み取ったことを書かせて意見を交換させたりなど、考察する力を高められるようにする。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

4年生では、資料を読み取り、活用できる力が目標値を上回ることを目指す。

5年生と6年生ともに、地図や地形資料の読み取りに関する問題で、推論や考察をできるようにし、目標値を上回ることを目指す。

【 社 会 】

(1) 社会の定着状況の概要

- 7年 「基礎」の目標値 62.1 に対して、正答率 59.4、「活用」の目標値 47.0 に対して正答率 51.3 と、「活用」は目標値を上回っているが、「基礎」は目標値を下回っており、基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。
- 8年 「基礎」の目標値 56.1 に対して、正答率 51.8、「活用」の目標値 43.3 に対して正答率 41.6 と、「基礎」「活用」ともに、目標値を下回っており、特に基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。
- 9年 「基礎」の目標値 59.6 に対して、正答率 59.5、「活用」の目標値 42.5 に対して正答率 50.6 と、「基礎」は目標値と同程度であり、「活用」は大幅に上回っていることから、「基礎」「活用」とも定着している様子である。

(2) 具体的な課題

- 7年 内容別正答率を見ると、目標値を下回っている領域が、「縄文時代～平安時代」「明治時代～昭和時代」「日本の政治」「日本国憲法」であった。特に「日本国憲法」の内容における「平和主義」の問題では目標値 40.0 に対して、正答率 5.0 であることから、学習内容における知識の定着が見られなかった。
- 8年 全体としてどの観点においても下回っているが、特に「思考・判断・表現」「知識・理解」における正答率が目標値よりも 5 ポイント下回っていることから、知識の定着および社会事象の説明を喫緊に改善すべき課題である。
- 9年 「日本の諸地域」の領域が目標値 54.0 に対して正答率 48.5、「近代の日本と世界」の領域が目標値 52.5 に対して正答率 45.7 と、2 領域が大きく下回っていた。領域におけるバラつきが見られることが課題である。

(3) 課題の原因

7・8 年では、知識の定着については学習した内容を復習する時間を授業時間内に確保できていなかった。また、説明・記述については学習問題に対しての考えを自発的に書こうとしないことが原因として考えられる。

9 年は、反復練習が不十分で、履修して時間が経過していない領域ほど定着していない。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7～9 年で共通して、授業の開始時に知識の定着を図る学習活動を毎時間 5 分程度実施していく。定期考査における記述形式問題を充実させて、記述形式問題に意欲的に取り組ませるようにする。授業においても考えさせる問題を発問し、自分の意見をノート等にかかせるようにしていく。また、ICT 機器が 2 学期より導入されたので電子黒板や書画カメラを活用していく。

9 年生は、履修して時間が経過した領域ほど定着しており、繰り返し学ぶことが重要であることを示している。今後も繰り返し学ぶ時間を確保していく。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

7・8 年生では、「思考・判断・表現」「知識・理解」の正答率を目標値よりも上回るようにする。

【算数】

(1) 数学の定着状況の概要

- 2年 「基礎」は、目標値の85.6に対し、正答率は92.4。「活用」は、目標値の58.6に対し、正答率は60.9であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。
- 3年 「基礎」は、目標値の72.2に対し、正答率は76.5。「活用」は、目標値の72.2に対し、正答率は50.8であった。「基礎」の正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。
- 4年 「基礎」は、目標値の76.7に対し、正答率は82.1。「活用」は、目標値の59.3に対し、正答率は69.0であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。
- 5年 「基礎」は、目標値の72.9に対し、正答率は82.0。「活用」は、目標値の53.3に対し、正答率は62.2であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。
- 6年 「基礎」は、目標値の71.2に対し、正答率は75.1。「活用」は、目標値の48.3に対し、正答率は54.6であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

(2) 具体的な課題

- 2年 ほとんどの領域で目標値を上回っているが、図形領域の問題のみ目標値が75.0に対して、正答率が74.3と下回っていた。「立体の面を写し取ってかいた絵を見て、使っている立体を見つけることができる。」の問題は、目標値が85.0に対して、正答率が73.7と下回り、「形や大きさを捉える力」や「図形を頭の中で再現する力」が欠けていることがわかる。
- 3年 「数と計算」は79.0と高い正答率を示していたが、「量と測定」の正答率は59.4で目標値を下回る結果となり、苦手な領域であると思われる。また、算数への関心、意欲、態度は、56.5であり、半数をやや上回る児童が算数に関心を示し、意欲的に学習している。計算する。図形を描くなどの領域は得意とする反面、「数学的な考え」をもとに課題を解決する力が十分育っていないことが分かった。
- 4年 「数と計算」の領域では、82.4と高い正答率を示していたものの、「量と測定」の領域では、目標値が73.6であるのに対し、正答率が74.8と他の領域よりも目標値に近い正答率であった。この点から、この領域を苦手と感じている児童が多いと思われる。そして、「算数への関心・意欲・態度」の観点では、他の3つの観点より、目標値に近いということから、今後、関心・意欲・態度を高めていく必要がある。
- 5年 どの領域も正答率が高く、目標値を上回っていた。「量と測定」の領域の「面積」と「数と計算」の領域の「億と兆・概数の表し方」に関しては、いずれも目標値に近い数値であり、他の内容と比較すると、課題と言える。「身近にあるものの量を推察する力」、「数の相対的な大きさについて理解する力」が十分身に付いていないと考えられる。
- 6年 どの領域も目標値を上回っていた。しかし、どの領域においても目標+5.0に達していない。その中でも「数量関係」においては、正答率54.8が目標値51.3に近い数値であり、課題と言える。また「計算の決まりを使って、四則混合の計算をする力」において、目標値80.0に対して正答率76.8と目標値を下回っていることから力が十分身に付いていないと考えられる。

(3) 課題の原因

- 2年は、図形領域のみ正答率を落としている児童が多く、日常的に図形に触れ合う機会や、計算問題に比べ図形に触れる問題を考える機会が少なかったと感じる。
- 3年は、時刻と時間の正答率が低かった。これは、生活の中でアナログ式の目盛に触れることが少なくなったことと、ある時刻から時刻までの時間を感覚的にとらえる経験が少なくなってきたことに起因すると考えられる。
- 4年は、「量と測定」の領域で長さや重さを読み取る部分の正答率が特に低かった。これは、普段の授業内で具体物に触れ、長さや重さの感覚を養うことが十分でなかったのではないかと考えられる。
- 5年は「面積」・「数と計算」のいずれも、学習したことを身近にある物や事象と比較したり、置き換えて考えたりする場面が少なかったと考えられる。
- 6年は、「数量関係」の領域で「計算の決まりを使って、四則混合の計算をする力」が、目標値を下回った。これは、計算の優先順位を十分理解できていないことであると考えられる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

- 2年は、「図形」領域の力を高めていくために、日常の中で、図形に触れる機会を増やすと共に、家庭学習でも図形領域の問題を考える機会を積極的に増やしていく。
- 3年は、それぞれの誤答をもとに作成された個別対策用のワークシートを活用し、それぞれのウィークポイントを本人に伝えるとともに、補習を行って課題克服の一助とする。また、ICT機器が2学期より導入されたので電子黒板や書画カメラを活用し、視覚的に訴える分かりやすい授業を実施する。
- 4年は、「量と測定」の領域の能力を高めていくために、授業において具体物に触れたり、身近なものを用いたりすることで、体感的に長さや重さの感覚を養っていく。また、2学期より導入されたICT機器を用いて、視覚的にも理解を深めていく。
- 5年は、問題を把握する場面で、文中に出てきた量について、他の具体物に言い換えて説明したり、授業で学んだことを日常につなげたりする活動を増やしていく。
- 6年は、問題演習を繰り返し行い、四則計算の優先順位を理解させていく必要がある。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

- 2年は、「図形」領域はもちろん、全ての領域で目標値を上回る正答率を目指す。
- 3年は、算数の基礎的な力を着実に身に付けさせるとともに、算数的思考力を育て、全ての領域で目標値を上回る正答率を目指す。
- 4年は、正答率の低かった「量と測定」の領域での能力を伸ばすとともに、全ての領域、全ての観点で目標値を上回る正答率を目指す。
- 5年は、今年度と同様、全ての領域で目標値を上回る正答率を目指す。
- 6年は、全ての領域で目標値+5.0を上回る正答率を目指す。

【 数 学 】

(1) 数学の定着状況の概要

- 7年 「基礎」についての目標値が 68.2 に対し、正答率は 73.1、「活用」についての目標値が 58.6 に対し、正答率が 61.7 と目標値を上回り、概ね良好であると判断できる。
- 8年 「基礎」についての目標値が 59.7 に対し、正答率は 59.2、「活用」についての目標値が 50.0 に対し、正答率が 48.1 と、どちらも下回っており、学習の見直しを行う必要があると判断できる。
- 9年 「基礎」についての目標値が 63.0 に対し、正答率は 73.6、「活用」についての目標値 48.6 に対し、正答率が 62.0 と、どちらも 10 以上上回っており、内容が十分に定着できていると判断できる。

(2) 具体的な課題

- 7年 「数と計算」の「小数、分数の計算」「整数の性質」が全国平均を下回っている。特に、小数や分数の活用の問題に課題がある。
- 8年 「比例と反比例」「平面図形」「空間図形」「資料の活用」が全国平均を下回っている。特に「空間図形」では、全国平均を 10 以上下回っている問題がある。
- 9年 「資料の活用」の「確率」が、目標値は上回っているものの、他と比べ正答率が低い。特に、確率を求める技能の問題では、目標値 50.0 に対して正答率が 50.4 であった。

(3) 課題の原因

7年は、小数・分数の計算の練習が不足していると考えられる。

8年では、図形問題に取り組む際に図をかくように指導している。しかし、図をかくことが億劫になり、その結果頭の中だけで処理をしようとしているため、図形に対してのイメージが湧かずに問題が解けないと考えられる。

9年では、確率を7年生の2, 3月に学習し、それ以降は扱わない。そのため、9年生の時には、学習した内容を忘れてしまっていることが原因として考えられる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7年の基礎コースでは特に、前時の復習を入念に行い、定着状況の確認を行っていく。

8年では、今年度の2学期から各教室にプロジェクターが設置されたので、関数や図形などの分野で有効に活用していく。

9年では、学期末や学年末などに、その期間の学習内容を総復習する時間を確保する。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

7年では、正答率が目標値を 5.0 以上上回れるよう指導していく。

8年では、正答率が目標値を 5.0 以上上回れるよう指導していく。

【理科】

(1) 理科の定着状況の概要

- 4年 「基礎」の目標値 69.0 に対し正答率は、68.6、「活用」の目標値 49.2 に対し正答率は 46.9 であった。「基礎」・「活用」共に、目標値に達していないのが現状である。身近な自然の観察や植物、昆虫などは、正答率が目標値を上回っている。しかし、太陽や電気、磁石の性質など実際に目に見えない物や扱いが不慣れなものなどは、目標値に達していないと言える。
- 5年 「基礎」の目標値 67.8 に対し正答率は 73.9、「活用」の目標値 45.0 に対し正答率は 51.0 であった。「基礎」・「活用」共に、目標値を上回る結果となった。しかし、問題の内容別正答率をみると、「水のすがた」の分野が目標値より正答率が下回っていた。
- 6年 「基礎」の目標値 67.9 に対し正答率は 72.9、「活用」の目標値 59.3 に対し正答率は 64.9 であった。「基礎」・「活用」共に、目標値を上回る結果となった。しかし、問題の内容別正答率をみると、「植物の発芽と成長」、「ふりこのきまり」、「けんび鏡の使い方」の分野が目標値より正答率が下回っていた。

(2) 具体的な課題

- 4年 「磁石の性質」分野に関して、特に評価が低い領域は、「磁石の特性に関する事項」領域の「自由に動ける状態の磁石には、N極が北、S極が南を指して止まる性質があることを理解している」問題で目標値 35.0 に対し、正答率 18.4 であった。また、同分野で「アルミニウムは磁石に引き付けられないことを理解している」問題で、目標値 50.0 に対し、正答率は 37.8 であった。磁石の性質を理解していないことが上記のことから分かる。学習の過程で「電気の通り道」と「磁石の性質」で知識が整理されていないのではないかと考えられる。
- 5年 「水のすがた」の分野の中で、特に正答率が低かったのは「沸騰して湯気になるまでに水蒸気の状態のものを指摘することができる」問題で、目標値 30.0 に対し正答率は 23.5 であった。水の状態変化のうち、液体から気体へ変化するときの様子についての理解が深まっていないことが分かる。
- 6年 「植物の発芽と成長」、「ふりこのきまり」、「けんび鏡の使い方」の分野の中で、特に正答率が低かったのは「ふりこのきまり」の分野である。目標値 60.0 に対し正答率は 52.2 であった。「ふりこのきまり」の分野のうち、「ふりこのきまりから、メトロノームのテンポを速くする方法を推察することができる」問題で、目標値 60.0 に対し正答率は 40.4 であった。ふりこの法則が十分理解できていないと考えられる。

(3) 課題の原因

4年は、学習内容の定着まで至っていないため時間が経過するとすぐに忘れてたり、知識が混在してしまったりしている。

5年は、実験を通して水の状態変化を学習したが、理科の言葉の意味と事象が結び付けられていないと考えられる。

6年は、実験方法と実験結果から得られることを結び付けて理解できていないと考えられる。また、学習したその時点では分かっているが、復習が不十分であるため、時間の経過とともに定着状況が悪くなっていると考えられる。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

4年・5年・6年共に、復習用プリントを授業で活用する。また、定期的に復習の時間を設けることで知識の定着を図るようにする。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

4年は、「太陽と地面の様子」や「電気の通り道」、「磁石の性質」などの分野では、デジタル教材等を活用し、知識として児童に定着させ、目標値の正答率を目指す。また、その他の領域に関しては、目標値を上回る正答率を目指す。

5年は、「水のすがた」の分野では、デジタル教材等を活用し、児童が学習内容を深く理解できるようにし、目標値の正答率を目指す。その他の分野については、目標値を上回る正答率を目指す。

6年は、「植物の発芽と成長」、「ふりこのきまり」、「けんび鏡の使い方」の分野では、デジタル教材等を活用し、児童が学習内容を深く理解できるようにし、目標値の正答率を目指す。その他の分野については、目標値を上回る正答率を目指す。

【理科】

(1) 理科の定着状況の概要

7年 「基礎」の目標値 61.0 に対し、正答率 58.4、「活用」の目標値 54.4 に対し、正答率 56.9 であった。「基礎」の学習内容が十分に定着していない。

8年 「基礎」の目標値 57.9 に対し正答率 56.9 で、「活用」の目標値 42.5 に対し正答率 31.8 であった。「基礎」は目標値に近いが、「活用」ができていない。

9年 「基礎」の目標値 59.8 に対し正答率 61.7 で、活用の目標値 53.8 に対し正答率 63.0 であった。「基礎」「活用」共に定着度は基準値に達している。

(2) 具体的な課題

7年 「物質・エネルギー」の領域で「塩酸の性質と塩酸を熱したときの変化」の問題で目標値 40.0 に対し、正答率は 32.7 であった。「生命・地球」の領域で「はき出した息には水蒸気がふくまれている」の問題で目標値 40.0 に対し、正答率 20.9、「陸上の生物の食物連鎖の作図」の問題で目標値 30.0 に対し、正答率 28.2、「三日月の位置から観察した時刻の推察」の問題で目標値 40.0 に対し、正答率は 24.5 であった。問題全体を通して思考・判断力と表現力に課題が見られた。

8年 「エネルギー」の領域が全体にできていないが、特に「力と圧力」の単元が目標値を大きく下回っている。他の単元は、知識問題は目標値と同様か上回っているのに対し、思考に課題が見られた。

9年 化学分野の特に「粒子概念」については目標値 58.1 に対して正答率 52.4 と下回っており、課題が見られた。

(3) 課題の原因

7年は、「物質」の領域、「生物・地球」の領域で目標値を下回っていた。特に、実験・観察をもとにして思考し、表現することと身近な現象と学習内容を関連付けることが苦手であることが原因と考えられる。

8年は、覚えることについては努力するが、実験結果から考察することが苦手で、すぐに答えを聞きたがる生徒が多く見られる。なぜという疑問を探求する体験が足りないと思われる。

9年は、主体的活動を特に多く取り入れることができていた生命の領域では正答率が目標値を大幅に上回ることができているが、実験等も教科書の内容のみにとどまってしまった粒子領域に関しては目標値を若干下回ってしまった。

(4) 課題解決のための方策（取組指標）

7年は、実験・観察でお互いの考えを発表し、学んだことを深められるように授業を展開するとともに身近な現象と学習内容がどのように関連付けられるか具体例等を示していく。また、苦手な領域の確認問題を長期休業中の課題として取り組ませる。

8年は、授業で、実験・観察を多く取り入れ、結果から考察する機会を増やしている。教科書通りに結果が出ない場合も必ず原因があること、理科の技術は生活と関連があることなどを示し興味をもたせ指導していく。

9年は、実験・観察を多く取り入れることはもちろんであるが、発展的な内容の演示実験を行う等、興味関心を引くことができるようにしていきたい。このためには教員自身が教材研究に励み少しでもより良い教材を提示していけるようにする。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

7年は、「基礎」の正答率が目標値を上回ることを目指す。「活用」の分野でも目標値より高い正答率を目指す。

8年は、「基礎」を伸ばすとともに、「活用」を目標値に近づける。

【 英 語 】

(1) 英語の定着状況の概要

8年 「基礎」の目標値 65.2 に対する正答率は 74.6、「活用」の目標値 50.5 に対し正答率は 60.5 であった。「基礎」も「活用」も目標値を大幅に上回っており定着できている様子である。

9年 「基礎」の目標値 70.0 に対する正答率は 83.9、「活用」の目標値 49.5 に対し正答率は 62.7 であった。「基礎」も「活用」も目標値を大幅に上回っており定着できている様子である。

(2) 具体的な課題

8年 「長文の読み取り」の「英文の内容を把握することができる」問題で、目標値 40.0 に対して正答率 29.0 であった。また、「読み取った英文の内容をふまえて、日記を書くことができる」問題では、目標値 30.0 に対して、正答率 13.7 であった。初見の英文を読んで理解する能力に課題があり、読解力が不十分である。

9年 「(how や when などを使って) 英語で質問する文を書く」問題では、目標値 30.0 に対する正答率が 32.9 であった。また、リスニング問題のうち、「資料をもとに英語で答える」問題は、目標値 30.0 に対する正答率が 27.5 であった。このことから、「書くこと」の力がやや弱いことが読み取れる。

(3) 課題の原因

8年は、基礎学力の定着は図られているが、その基礎学力を活用できず正確に英文を読み取れていない様子が見られる。また、リスニングの英文の要点を聞き取ることができる問題(家族の説明)では、目標値 75.0 に対し正答率 82.3 であり、文字に対しての読解練習が必要である。

9年の「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の全国平均正答率がそれぞれ 75.6、69.1、59.6 であることから、他の活動と比べると「書くこと」の難易度は高いといえる。また、日頃から「書くこと」を練習する機会が少ないのも一因である。

(4) 課題解決のための方策(取組指標)

8年は、読解能力の強化を行うために、教科書以外の英文にも触れさせ多量の英文を読む機会を与える。また、家庭学習で読解の学習を習慣化させるために語彙指導を強化し、読解練習において学習した語彙の知識を活用して取り組ませる。

9年は、日頃の授業に「書くこと」の活動を積極的に取り入れ、慣れさせる。例えば、新出文法を習った後にその文法を使って英作文をさせたり、「夏休みの思い出」「将来の夢」など、テーマを決めてまとまりのある英文を書かせたりする。

(5) 次年度の数値目標(成果指標)

8年は「英文の内容を把握する」という面において、目標値を上回る正答率を目指す。また、その他の領域に関しても目標値を上回る正答率を目指す。